NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER

& Seig

No.
276
Mar.2020

特集

教職協働で、つよくなる。

&Seig NEWS LETTER
SEIGAKUIN NEWSLETTER
No. 276
Mar.2020

昨今の大学・学校事務では、事務職員（以下職員）が自ら考え積極的に学校運営に関わることが求められています。職員の学校運営への関わりが増えた分、仕事の質が大学・学校の質に関係するようになったとも言えます。このため職員が本来の仕事に従事できる環境が整っているか否かはとても重要です。
聖学院では2018年から、各部署の役割を見直し課題を見つけ出す「業務改善プロジェクト」が発足し、職員がより効率的に働ける環境整備が進められています。またテクノロジーの進化により、ICTを活用することでできる業務改善も増えています。プロジェクトリーダーの岡部さんと聖学院中高でICTの環境整備をしている塩川さん、さらにICTによる業務改善を得意とする日本マイクロソフト株式会社（以

CONTENTS

01
&Talk ［教職協働］

05
focus-教職協働
［聖学院大学　教務課］

06
focus-教職協働
［聖学院大学　研究支援交流・出版会事務課］

07
focus-教職協働
［法人事務局　経理課・財務課］

08
focus-教職協働
［女子聖学院中学校・高等学校　広報室］

09
在校生の活躍
卒業生の活躍

11
Seig NEWS

14
Our Mission

15
聖学院歴史探訪

教職協働
業務改善とICT

&Ta

編　　集／学校法人聖学院　学院広報センター
デザイン／株式会社キュー・ジー
発 行 日／2020年3月19日

下マイクロソフト）の多田さんの3人に集まっていただき、「業務改善プロジェクト」とは具体的にどういうものか、ICTによって何ができるのかを語っていただきました。3人のお話から、誰のために業務改善があるのかという本質が見えました。

業務改善プロジェクトとは

岡部　業務改善プロジェクトの最初のミッションは「機能的な組織作り」でした。部署名と関連があるというだけで、その部署の実務とは関係ない仕事が組み込まれているケースがあります。例えば「教職関連」は教務課業務に位置付けられますが、業務によっては教務本来の役割とは異なる要素が見えてくる場合があります。“教職”の名称にひっぱられてしまうのです。このような部署本来の役割とは異なる業務を、より合理的な部署にセットアップし直します。そうすることによりどちらの部署も本来の業務に集中できますし、組織全体も「機能的」になります。こうした経緯を重ね、2020年4月から新組織がスタートします。

また、並行してMicrosoft Teams（以下Teams）※1の利用やペーパーレス化等、機能面における改善も行っています。当初は幅広い業務改善のどこから手をつけていいのか途方に暮れていました。その時にプロジェクトメンバーから、マイクロソフトの多田さんをご紹介頂きました。

多田　来社いただいたのは2018年12月ですね。私が聖学院の担当営業で、聖学院のIT部門の方とはもともとお付き合いがあり、ご相談いた

lk

**聖学院で「業務改善プロジェクト」という取組が進んでいます。
職員の仕事の効率化を図るこのプロジェクトについて、
プロジェクトのリーダーである法人事務局の岡部さんと、
業務の課題をICTで解決する日本マイクロソフト株式会社の多田さん、
聖学院中高で情報インフラを管理されている事務室の塩川さんにお話しいただきました。**

多田 千明

日本マイクロソフト株式会社　デジタルセールス事業本部 公共営業本部 アカウントエグゼクティブ。一般企業部門の営業を経て、2015年から文教部門を担当。現在は全国の教育機関に対して、ICTを活用した働き方・教え方・学び方改革の提案を行う。

岡部 剛

聖学院大学卒業後、総合パッケージ会社に就職。受注から製造、出荷までの総合管理システム構築のリーダーを担う。2006年学校法人聖学院に入職。聖学院大学学務部教務課、教育事業課、学生課を経て2015年7月より総務部長兼課長に就任、現在に至る。

塩川 祐司

埼玉大学卒業後、ソフトウェア開発会社に就職。銀行、鉄鋼、保険、旅行、マスコミ会社のシステム開発に従事。求められることに応じて、要件定義、設計、コーディング、テストの工程に従事。2015年10月より学校法人聖学院に入職。情報担当として聖学院中学校・高等学校事務室に配属、現在に至る。

だきました。

岡部　プロジェクトチームの7〜8名でマイクロソフトに伺いました。働き方改革に向けての取り組みや、マイクロソフトの皆さんのリアルな仕事振りを拝見しました。

ICTによる業務の効率化

多田　私が所属しているデジタルセールス事業本部では、営業活動にAIを取り入れたり、Teamsを使ったTV会議でお客様との打ち合わせを行っています。もちろん、聖学院のIT部門の方ともTeamsで打ち合わせをさせていただいています。聖学院大学の場合、IT担当者が2名なので、弊社との打ち合わせのために外出されると業務に支障が出る可能性があります。そうならないよう、お互いにその場にいながらTeamsで打ち合わせをさせていただいてます。移動時間も削減出来るので、より多くの時間をお客様対応に注力できます。

「事務は教育環境を整備することで子どもの学習能力をアップさせることができる。間接教育を担っています」と語る岡部さん

岡部　業務改善プロジェクトでも大学と駒込のキャンパスが離れているので、Teamsを使ったTV会議が定着しています。最初の頃はマイクを前に話すことや、コミュニケーションのズレに抵抗感もありましたが、慣れてくると当たり前になり、今や手放せなくなっています。

塩川　私は聖学院中高で情報担当と庶務の2つの仕事を担当していますが、情報センターの会議が事務の仕事と重なることがあります。そういう時に私もTeamsを使っています。事務の作業と並行しながら会議ができるのは良いですね。

岡部　コロナウイルスが流行っていますが、例えば学校が閉鎖になった際、Teams for Education※2を使えば学生や生徒は家でも授業が受けられます。ツールを事前に活用していれば、いざという時も移行がスムーズですよね。

塩川　こうしたツールを使って遠隔地に授業を届けるケースが増えてきていますね。

多田　他の学校の例になりますが、Microsoft Forms（以下Forms）※3というアンケート集計ソフトを使った授業で、生徒が「効率的になったから気に入っている」と言っていたのが印象的です。教職員側だけではなく、生徒側も効率を考えるようになったのが凄いなと思いました。また「チャットなら普段言えない事が言える」と言う生徒もいます。もちろん対面で話す事も重要ですが、ツールがあることによって、これは言いにくいからチャットにしよう、というコミュニケーションの選択が生まれると思います。

塩川　今、聖学院中高ではiPadを80台貸し出しています。でもそれだけでは足りなくなってきています。そこで、ある学年からは、BYOD（Bring Your Own Device）※4を考慮しても良いのではないかと検討し始めています。採用となれば、次段階からTeamsを使うようになっていくでしょう。

多田　Formsを使うと、小テストやアンケートの回答をその場で見らます。先生はリアルタイムで正解率を把握でき、その場で理解度の低い問題を再度、説明することができます。

教職協働と間接教育

岡部　職員の仕事は間接的に教育に携わっていると思います。例えば、空気中のCO^2濃度が高くなると眠くなり、集中力が欠けるというデータがあります。職員はCO^2濃度を下げる設備を整えることで授業をサポートすることができます。学習環境の整備という視点から学習能力をアップさせ、間接的に関わってくる。こういう発想は職員特有の視点です。

塩川　確かに授業の主導は教員で、その教員が何かをしたいと言った時のために職員が先回りして備えることによって職員は間接的に学習のサポートをします。その授業には何を準備しておくべきかという発想が職員には必要ですね。

岡部　今の私のテーマですが、学校教育法37条14項の「事務職員は、事務に従事する」という文言が「事務職員は、事務をつかさどる」に差し替わりました（2017年4月施行）。「つかさどる」とは「マネージメントをしていく」ことです。施行前は教員の指示のもと、受けた仕事を迅速かつ的確に行う事が職員の役割でしたが、施行後は言われた事をやるだけではなく、その先にある課題と着地点を見据えながら業務を遂行する力が求められるという事です。聖学院中高では、「思考力」を謳っていますが、その「思考力」が、我々にも課せられていると思います。

「課題と着地点を予見して教員のサポートをする。そのためにはコミュニケーションが大事です」と語る塩川さん

塩川　課題と着地点の予見は求められていると思います。ネット環境は整えたものの、いざ授業で使ってみるとつながらないというトラブルがありました。授業の内容を聞いてみると学年全員150人くらいがネットに同時にアクセスする授業だったんですね。当時の聖学院中高では100人ぐらいしか同時にアクセスできませんでした。ただネットが

つながるようにするだけではなく、授業の内容も把握して対応しておかなければいけないと思いました。

岡部　教員のやりたい事を職員として吸収して、それをマネージメントして提案していく力が求められているんですね。

塩川　それを実現するためにはコミュニケーション力も大事だと思います。例えば「来年度オンライン英会話の授業をもちます」と職員会議の議事録に記載されていたとします。それに対して何人でどれくらいの期間やるのかなど想像力を働かせて、詳細をちゃんと確認しないと予見にはつながりません。

業務改善とコミュニケーション

塩川　部署間のコミュニケーションでも同じかもしれません。各種証明書の発行もシステムで管理されています。何か名称が変わったらシステムも変えないと証明書に反映されません。他部署との書類のやりとりは「他部署が何か変えた」という意識で読んでいないとシステムに反映できてなくて後で大慌てになります。常に自分事化してアンテナを張っている必要があります。

岡部　立地的に近いのであれば直接話せばいいことではあるのですが、あえてTeamsを使うことで情報の見落としは防げるかもしれませんね。情報が共有されたという履歴が残っていれば重要な情報をスルーしてしまった時でも、「何か見落としているかも」と気づいた時に検索したり履歴をたどれるので対応もできます。

「ICTを導入したその先に何があるかが大事。それをお客様と一緒に考えて手助けしたいです」と語る多田さん

多田　何か計画がある時に、例えば「働き方改革プロジェクト」といったヴァーチャルチームをTeamsで立ち上げれば、自分がそのチームに属しているという意識が強くなると思います。また弊社の場合、社員は外出が多いので、社内にいる何人かに口頭で言ったとしても、エビデンスという意味も含めてTeamsに履歴を残しておくことが多いです。

岡部　職員が管理系の仕事も兼ねるとすれば、ヒト・モノ・カネに加えて、時間と情報も大きな要素になってきます。教員の直接教育の時間を増やす事も間接教育の役割であり職員に求められることです。そうすると、時間の概念がより重要になってきます。例えば複合機を導入する際、コストダウンを実現するためにスペックの低い機種を導入したとします。結果、排出される紙のスピードが遅く、子どもへの教育時間が減少するかもしません。職員は職員としてやるべき目標はあるものの、子どもに最大限の教育を提供するためにはどのスペックを選べば良いかをプロとして提案していかなければなりません。そして、役割の棲み分けを明確にして、そのセクションで責任を持ってマネジメントしていく。そこが改善ポイントで、そのためのコミュニケーションを密に図っていかなければいけないと思います。

塩川　コーポラティズムという言葉を教わった事があります。他部署と協働して働いていくことです。そういう考え方がないと情報やサポートの抜けや漏れが多くなり、学校全体の損失につながりかねません。やはりコミュニケーションは重要だと思います。

多田　弊社はWindowsやOffice、クラウドサービスを扱うICTの会社ですが、それを導入した先に何があるのか、それが大事だと思っています。導入した先をお客様と一緒に考えて、そこに向かうために手助けしたいと考えています。

岡部　あくまで学校はチームであって教員だけが学校教育をしているわけではありません。職員も含めて一つのチームです。事務職員は下働きという考え方が普及しているかも知れませんが、教育の担い手である部分も確実に増加しています。そのために我々が出来るのは時間と情報を有効に活用することです。それを子どもたちに還元していくのが業務改善のその先にある目標です。

（取材日／2020年2月）

※1　Microsoft Teams
Microsoft Teamsは、Office 365で利用できるコラボレーションツールです。Teamsには多彩な機能が搭載されており、オンライン会議、ファイルの共有・共同編集、プロジェクト管理など、社内で必要なコミュニケーションをスムーズに行うための機能が豊富に含まれています。

※2　Teams for Education
Teamsには、教育用にカスタマイズされたTeams for Educationがあります。会話、教材、学習アプリを1か所にまとめられる学習用デジタルハブとして活用できます。教師は、コラボレーション用の教室の作成、専門的な学習コミュニティへの接続、学校のスタッフとのコミュニケーションを行うことができます。

※3　Microsoft Forms
Formsとは、Microsoftが提供するクラウドサービスの一つで、WebやTeamsを通じてフォーム（アンケート）やクイズを作成、共有できるサービスです。

※4　BYOD（Bring Your Own Device）
自分の所有する端末や自宅にある端末を学校に持っていって利用する形。デンマークなど、海外では多く見られるスタイルで、日本でも一部の高等学校ではBYODが採用されている。（参考：総務省「クラウド導入ガイドブック2015」）

focus*（教職協働）

聖学院を支えるプロフェッショナル
職員の皆さんにお話を聞きました

教務課

原田貴士さんのお仕事

部署詳細　●STAFF　17名　**●オフィス**　聖学院大学　8号館　1F

学生を中心に据えてカリキュラムを構築する「学び」のプロデューサー

履修や授業など学生の「学び」を管理している教務課。カリキュラムを作り授業に必要なものを準備し、学生の単位や資格の相談にものっています。一見、受動的に書類を受理するクールな部署という印象を持たれがちですが、教務課課長原田さんが語る部署の姿勢には、常に学生への温かい視線が込められていました。

「カリキュラム作りは、大学が学生に対してどのような学びを提供するかを決定するとても大切な業務です。大学の学位を与える方針と実際に開講する授業に矛盾があったら、学生は学ぶことができません。そうならないように大学の理念をもとに、各学科のポリシーをカリキュラムに反映していきます。とはいえ実際に授業を行うのは先生方ですから、先生方に異なる視点を提示して一緒に授業を考えるということになります。以前は、事務職というと事務作業的な仕事だけを担っているイメージがあったかも知れません。今は、学生の関心度や社会的要請など、教員とは別の側面から提案をする役割が求められていると思ってます。それこそが教務課の考える教職協働です。
また学生への対応で課題と感じていることの一つに、離学者への対応があります。自分だけでは将来のビジョンがかたまらず支えを必要としてる学生が増えているように思います。とはいえ、ほとんどの学生が一度目標を見つけてしまえば、どーんと走りだします。ならば、大学生活の中でそれを見つける手伝いをしたい。教務課では、学科ごとに担当者がいます。各担当はその学科の学生と深く接しているので、思い入れも出てきます。単に退学者数という『数字』を減らすためではなく、一人の人間として夢をあきらめて欲しくない、みんながそう思って学生に接しています。ただ、教務課に来るときにはもう離学が決まってるケースがほとんどです。そのため教務課だけではなんともできない歯痒さもあります。他の部署でも学科別の担当者がいると思います。例えばその担当者が部署を超えて横に繋がって、『学生からこんな相談があったよ』と気軽に共有できれば学生に対して多角的に対応できるはずです。『キミのことをちゃんと見てるよ』という大学の姿勢にもなるのではないでしょうか。そういう連携が叶えられればいいなと思います。」

（取材日／2020年1月）

（左）広々としたカウンターを備える教務課。明るく綺麗で学生にとっても親しみやすい空間です。（右）教員も気軽に相談にきます。教務課が築いてきた信頼関係が垣間見れました。

研究支援交流・出版会事務課

菊池美紀さんのお仕事

部署詳細　●STAFF　5名　**●オフィス**　聖学院大学　ディサイプル館　2F

※研究機関や研究者から研究課題を公募し、第三者による審査を経て優れた課題に配分される研究資金。（出典：朝日新聞デジタル　コトバンク　競争的資金　デジタル大辞泉の解説）

研究者にとって今何が必要かを考える研究事務

大学の教員には研究者としての側面と教育者としての側面があります。その研究者としての側面を広範囲にサポートしているのが「研究支援交流・出版会事務課」です。名前が長いこともあり、異動するまでこの部署が何をする部署かよくわからないと思っていたという課長の菊池美紀さんに、部署の役割とこれからの展望を伺いました。

「役割としては、聖学院大学総合研究所（以下総合研究所）の事務、教員の研究支援、総合研究所の補助活動の3つがあります。総合研究所の事務は、研究所の研究会・講演会等の運営・広報と、論文をまとめた『聖学院大学総合研究所紀要』の発行などです。研究支援は、研究そのものには関わらない周辺事務を担当しています。現状、代表的な業務が競争的資金※の申請と執行のお手伝いです。補助活動とは、駒込の聖学院キッズ・イングリッシュや心理相談　グリーフケア・ルームなどの活動の支援です。また出版会として書籍も出版しています。校閲校正、装丁手配、書店営業まで行います。

今、注力したいと思っているのが研究支援です。資金面に偏りがちだった研究支援を、本当に先生方に求められる支援とは何か、という観点から見直そうとしています。まずは研究室訪問や新任の教員へのアナウンスを通して、私たちも先生方にどんなニーズがあるかを把握したいです。また、『研究環境改善プロジェクト』のメンバーに加えていただいたので、来年度から育児中の研究者に対する助成制度ができないか検討してもらっている所です。具体的には研究のための出張を対象とする補助を提案しました。私も育児中なのですが、泊まりがけの出張は行きにくいと感じてしまいます。研究のためにどうしても必要な出張があるときに、それを支える制度があるだけで全然違うと思います。シニア研究者に対しても何か出来ないかと考案中です。

本学は教員が、教育に多くの時間を使う大学です。だからこそ研究をしようとしている教員のサポートとなるご提案をしていきたいと思っています。大学の教育は、研究があってのものだと思います。そこを維持していただくためにやれる事をやっていきたいです。」

（取材日／2020年1月）

（左）業務内容は多岐にわたり出版業務も行っているので課員には校正の専門家もいます。（右）教員の書籍、『聖学院大学総合研究所紀要』の他に総合研究所の教員の研究会・講演会等の内容を掲載した『聖学院大学総合研究所NEWSLETTER』も発行しています。

経理課・財務課

佐藤嘉一さん（左）、倉橋基さん（右）のお仕事

部署詳細　●STAFF　9名　**●オフィス**　聖学院大学　ディサイプル館　3F

大学の未来のための資金を調達する、補助金獲得のスペシャルチーム

大学の学納金の管理や経費の精算、補助金業務を担当している経理課と、寄付金集めや銀行等外部との交渉、そして経理課同様補助金業務を担当している財務課。両課合同で進めている大学補助金の話を、それぞれの課長である佐藤さんと倉橋さんに伺いました。

倉橋　補助金とは、大学の規模や取り組みなどによってお金が給付される制度です。私たちが携わっているのはその中の奨励的補助金と呼ばれるもので、国や自治体の方針に沿った取り組みをしている大学を支援するというものです。例えば地域貢献をしている大学や、ポリシーをもって改革を進めている大学の取り組みをサポートする補助金などがあります。補助金申請の流れとしては、文科省や私学事業団から配信される調書（調査書）を私が確認して、どの部署の誰に相談すべきか考えます。

佐藤　経理部が大学の全ての取り組みを把握しているわけではないので、他部署のみなさんに協力してもらいます。

倉橋　その後、該当者に調書の作成を依頼します。関係部署が多岐にわたる場合には、部署を横断する打ち合わせをして、実際に調書に必要な情報をもらいます。最後に私と佐藤さんで整えて提出します。担当者のノウハウというほどではないですが、調書を見たときに誰がそのことに一番詳しいかを見極める目利きと人脈はあったほうがいいかもしれません。

佐藤　送られてくる調書も、補助要件など複雑なことも多く、読み手が判断しなければならないところが結構あります。そのため憶測ではやらず一つひとつ関係部署に確認していく愚直さも大事だと思います。

倉橋　他部署との連携は、みなさんとても協力的です。締め切り間際の申請でも、忙しい時間をさいて間に合わせてくれます。

佐藤　補助金の説明会に行くときも、様々な部署の方々にも積極的に参加していただき、その後みんなで『これとこれを組み合わせて、あの部署とこの部署でやったら上手くいくんじゃない』と話し合っています。

倉橋　みんなで取り組もうという感じが徐々に醸成されています。職員が連携して助け合う、そんな時代になってきているのではないでしょうか。

お二人は、他部署の方から相談を受けることがとても多いそうです。相談を受けるのが「苦にならない、助けてあげたい」と言います。他部署との連携がうまくいっている背景にはお二人の人柄も間違いなくあるように思いました。

（取材日／2020年1月）

（左）経理部財務課課長の倉橋さん、他部署への協力依頼はメールだけではなく、顔と顔を合わせたコミュニケーションを大切にしています。（右）経理部経理課課長の佐藤さん、税理士資格も持っている経理のプロです。

女子聖学院中学校・高等学校 広報室

矢部幸子さんのお仕事

部署詳細　●STAFF　6名　●オフィス　女子聖学院中学校・高等学校　職員室

教職合同チームを行動力でサポートする

女子聖学院中学校・高等学校（以下女子聖）の広報室は教員と職員半々で構成され、合同で業務を行なっています。その中で塾訪問など渉外の業務を担当している矢部さんに広報の仕事と教職協働について伺いました。

「やはり学校というのは教育がメインです。そこをきちんと語れるのは教育者だと思います。ですから広報の基本方針は教員が決めています。広報という仕事は学校全体に関わる業務だと思います。広報を突き詰めると学校全体で改革をしなければならないこともあります。それは職員だけではできません。教員は授業という本分があるため時間に限りがあります。広報には細かい事務仕事が多々あるのでそういうところは職員が得意なところです。教員、職員どちらかだけでは上手く動かせないのが広報です。教職が合同でやることの強みはそこにあると思います。
広報に携わる一職員として大切にしていることは『行動力』です。学校は教員が主体的に動いて、職員はそこに付随する作業をする人と思われがちです。しかしそうではなく職員が能動的に動くことによって業務を活性化させられるはずです。自ら考え行動することが大切だと思います。例えば塾に行くと、色々な意見が塾の先生から伺えます。受験生や保護者に最も近い塾の先生の意見は、今後の改善ポイントにもなるのでとても重要です。外に向かって伝えるだけではなく、外で聞いてきた意見を校内にフィードバックするようにしています。また様々な学校の入試結果がわかる報告会などにも参加するようにしています。他校の教員の方々のお話も聞けますし他校の取り組みなど色々情報交換ができます。入試結果の実際の数字もデータとして入手できます。学校の中からは他校の動向や、保護者・受験生の意向など、外が見えにくいものです。その見えにくい部分を俯瞰して、きちんと見極めて行動できるよう心がけています。
実は前職では営業職に就いていました。当時私は女子聖に子どもを通わせている保護者であったのですが、偶然にも職場に女子聖の卒業生がいました。彼女に『女子聖は、いい学校ですよね』という話をしたら、彼女は『通って価値のある学校です』と言ったのです。女子聖は卒業生自身が誇りにしている学校です。そのことをもっと広報しなければという思いで仕事をしています。」

（取材日／2020年2月）

（左）『夏の女子聖体験日』年に1回、部活・授業体験など女子聖学院を体験できるオープンスクール。全教員、生徒みんなで受験生をお迎えします。広報室が主体となり会を取り仕切っています。（右）矢部さんが塾などに持参する学校紹介ツール。「卒業生自身が誇りにしている学校」が伝わる冊子です。

玉之内　菖

活躍ファイル　*No.12

聖学院大学心理福祉学部　心理福祉学科　2年

山口　雄大

活躍ファイル　*No.13

聖学院大学人間福祉学部 2014年卒業
社会福祉法人　荒川区社会福祉協議会勤務　社会福祉士

在校生の活躍

釜石から学んだ「命の大切さ」を子どもたちに伝えていきたい

聖学院大学ボランティア・まちづくり活動助成事業 “防災戦隊マモルンジャー”の発起人であり代表者でもある玉之内さんは、東日本大震災の復興を目的として2011年から活動を続ける聖学院大学復興支援ボランティアチーム（以下SAVE）の2020年度の代表も務めています。福祉系の学部以外は受験しなかったという玉之内さんが、福祉に関心を持つキッカケとなったのもやはりボランティア、高校2年の時に参加した泊まりがけの、サマーキャンプのボランティアでした。そこで出会った子どもたちに対して、「自分に専門的な知識があればもっと支援ができるのに」と思ったことが福祉への興味を強めました。SAVEには友だちに誘われて参加。1年生のときに、SAVEが実施するスタディツアーの一つ“サンタプロジェクト”でリーダーを務めました。「まさかリーダーをやるとは考えてなかった」と言う玉之内さんは、今ではSAVEの代表者。決して楽ではなかったリーダーの体験からは、“達成感”と“成長”を得られたと、まさに成長を感じる、自信に満ちた表情で語ってくれました。

子どもたちに防災の大切さや知識を教えるためのヒーロー“防災戦隊マモルンジャー”は、SAVEのメンバーを中心とする15名のメンバーで活動中です。釜石で学んだことを埼玉で伝えたいと、「楽しく、面白く、わかり易く」をモットーにイベントなどに出演しています。握手会が行われるほど、子どもたちに大人気のため、出演依頼が次第に増えて、常にメンバーが不足状態。一緒に活動してくれるメンバーを大募集中とのことでした。

（取材日／2020年1月）

卒業生の活躍

一歩踏み出してみると、面白い人、面白い活動に出会うことに気づいた

ボランティア活動支援センターの川田さんが「ボランティア論」という授業を担当していて、その授業で、大学内にある障害＝バリアを見つけて、バリアフリーマップを作った先輩たちの話を開き、自分たちでもマップを作ることにしました。そして私たちは面白い発表をしたいと考え、戦隊ヒーローに扮した劇を行いました。実はこれが聖学院の戦隊ヒーローのルーツ「バリレンジャー」です。「サポメンジャー」、そして現在は「マモルンジャー」として後輩たちに引き継がれ活躍していると聞いています、と懐かしい話をしてくれた山口さんは、SAVEの初期メンバーで、同級生と二人で代表を務めていました。SAVEの活動で特に印象に残っているのは、自らのアイデアがカタチになった「桜プロジェクト」。いろいろと自由にやらせてもらえたことで自ら行動することの価値を知ったと言います。「一歩踏み出してみると、面白い人、面白い活動に出会うことに気づきました。」

学生時代に身につけた価値観は現在の働き方にもつながっています。荒川区の社協では、部署とは別にプロジェクトがあります。山口さんは若者が参加したくなるボランティアを企画する若者プロジェクトのチームリーダーとしても活躍。ボランティアコーディネーターとして活躍したいというのが入職時からの目標であり、そこには、ボランティアに出会う前の自分のようにやるべきことを見つけられずに燻（くすぶ）っている若者を、地域の活動に巻き込んで、福祉に関わるきっかけを作り、その面白さを知ってもらいたいという想いがあるのでした。

（取材日／2020年3月）

まだまだあります！

Seig NEWS

学生も生徒も教員も職員も
次のステップへと
日々新しい試みをしています。

聖学院大学

冬のリトリート

2月6日（木）、7日（金）の1泊2日、森林公園ホテルヘリテイジ（熊谷市）にて冬のリトリートを開催。リトリートという言葉には「後ろに退く、避難する」という意味がありますが、聖学院大学のリトリートでは、普段の生活から一度離れて自分自身と向き合い、語り合う時間を大切にしています。2019年度冬は「働きアリの限界～その時気づくキリギリスの大切さ～」をテーマに、竹井潔准教授から主題講演をいただきました。有志の学生・教職員約50名が働くことと休むことの大切さについて語り合う時を持ちました。

聖学院大学

第4回グローバルキャンプ開催

聖学院大学は2月12日（水）から15日（土）までの4日間、今年が第4回目となる「グローバルキャンプ」を実施しました。英会話イーオンとの産学連携で、留学や就職に向けて英語力を高めることを目的としています。今回の具体的なゴールの一つは最終日に行われたTOEIC-IPの受検。4日間のハードトレーニングの成果を測りました。プログラム参加者は、留学生も含む聖学院大学生、埼玉県内在住・在学の他大学生および高校生で、52名が参加しました。

聖学院大学総合研究所

ニーバー研究会・組織神学研究会、伝道研究会を共同開催

2月28日（金）、聖学院新館（駒込）にて、2019年度第2回ラインホールド・ニーバー研究会・組織神学研究会および、第1回伝道研究会を共同開催いたしました。「ラインホールド・ニーバーの近代思想批判の特質―チャールズ・テイラーとの比較において」を主題に千葉眞先生（国際基督教大学特任教授）より発題いただきました。清水正之理事長をはじめ教員を中心に10名の参加者があり、終了時刻を過ぎてからも質疑応答が続いていました。

聖学院中学校・高等学校

中学1年生L.L.T×聖学院大学ボランティア学生

聖学院中学校では「共に学び、共に生きる」ことを考えるために、L.L.T（Learn Live Together）というプログラムを持っています。2月12日（水）のL.L.Tでは、聖学院大学から普段ボランティア活動を行っている学生16名が5クラスの各グループに分かれてメンバーとして参加。自分のボランティア体験を通して学んだことや、暮らしている地域の課題について、中学1年生と共に考えました。決まった答えのないテーマだからこそ、それぞれの考え方を大切にしながら自分や他者への理解を深める機会となりました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

聖学院中学校・高等学校

いまをつなぐ学び合い「クエスト・オンライン」に参加

2月23日（日）新型コロナウイルス感染拡大に伴い、クエストカップとしての開催は中止となりましたが、オンラインでの開催が行われ、聖学院中学のチームも学校のフューチャーセンターから参加。富士通のミッションに対して、チーム「typhoon810号」が「台風をぶっ壊す」アイデアをプレゼンデーションしました。また、2月9日（日）に「マイプロジェクト関東Summit」に、2月16日（日）には「キャリア甲子園準決勝」に聖学院高校の生徒が参加をし、キャリア甲子園は決勝大会への切符を手にしました。

女子聖学院中学校・高等学校

東京都アンサンブルコンテストで金賞受賞

府中の森劇場において、東京都高等学校吹奏楽連盟の第43回アンサンブルコンテストが開催されました。女子聖学院からは木管五重奏と打楽器三重奏の2チームが参加。1月5日（日）に出場した木管五重奏のチームが金賞を受賞しました。1月18日（土）には、同じく府中の森劇場にて、東京都中学校吹奏楽連盟の第53回アンサンブルコンテストが開催され、木管五重奏のチームが出場をし、金賞を受賞しました。

女子聖学院中学校・高等学校

東京女子大学交流企画

1月27日（月）、高Ⅱ世界史Bの授業に、東京女子大学現代教養学部教授の佐野正子先生をお招きして、『アジアの子どもたちへのまなざしータイ北部山岳少数民族の子どもたちの施設メーコックファームの取り組み』と題して、出張講義が行われました。先生は、東京女子大学の学生を毎年ワークキャンプに引率されている体験を語られました。女子聖学院の生徒たちは、メーコックファームの子どもたちや山岳民族の暮らしを学び、「自分たちならこの環境でどのように生活をしていくか？」についてグループワークを実施。アジアの人々に目を向け、共に生きることを考える機会となりました。

聖学院小学校

第35回 東京私立小学校児童作品展

東京私立小学校児童作品展「ほら、できたよ」が、1月29（水）～2月3日（月）まで銀座松屋デパートにて開催されました。今年で35回目となるこの作品展は、毎年たくさんの参加校があり、数々の作品が展示されます。聖学院小学校のテーマは「森の音楽会」。展示スペースには児童全員の思いが詰まった作品が並べられました。個性溢れる素敵な作品で、来場者の目を楽しませました。来年はどんなテーマで作品が飾られるのか、今から楽しみです。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

まだまだあります！

Seig NEWS

●お知らせ

NEWS LETTER No.275 の10ページ「私のオススメの一冊」で「誌上書評バトル」の企画を開催させていただきました。ご投票いただいた皆様、どうもありがとうございました。僅差ではありましたが「ルリユールおじさん」が一番の票を獲得いたしました。プレゼントの当選者につきましては、学院広報センターよりご連絡をさせていただきます。ご協力ありがとうございました。

聖学院小学校

交通安全教室

1月17日（金）、聖学院小学校1年生のための、交通安全教室を行いました。警視庁から騎馬隊をお迎えし、交通安全について学びました。一人ずつ馬に乗せてもらい、校庭を一周。ゴールでは馬と一緒に記念撮影を行いました。児童たちは、乗馬した時の視界が想像していた以上に高くて驚いたようです。また、実際の横断歩道を使い、道路を安全に渡る練習も行いました。安全な渡り方を、おまわりさんから直接教えてもらえる貴重な時間となりました。

聖学院幼稚園

豆まき

2月3（月）といえば節分。聖学院幼稚園も園内で豆まきを行いました。手作りのお面をかぶり、鬼に扮した年長組に向かって、年少組は「鬼は外～福は内～」と大きな声で豆を投げました。豆をまくのに必死になる子や、豆を拾うのに集中する子、逃げまわって疲れている鬼さんなど、園庭はとても賑やか。お天気にも恵まれて、子どもたちは思いきり豆まきを楽しみました。

聖学院幼稚園

おもちつき

1月16日（木）、おもちつきを行いました。園内は朝からもち米の蒸しあがる美味しそうな匂いに包まれていました。先生やお手伝い来てくれたお父さんと一緒に「ぺったん、ぺったん」とおもちつき。順番を待っているお友達は「よいしょー！」と声をかけて応援しました。つきたてのおもちを小さく丸め、お母さんにあんこや海苔など好きな味をつけてもらい、美味しくいただきました。おもちのパワーで今年もみんなが元気に過ごせますように。

聖学院みどり幼稚園

みどり幼稚園×大学留学生との交流会

みどり幼稚園では初代園長の時代より、国際理解や国際交流を大切にしてきました。普段の保育の中でも、年中・年長の園児はネイティブの先生による「英語の時間」を通じて、国際理解を深めています。そのような取り組みの中、2月7日（金）には今年で4回目となる「みどり幼稚園×大学留学生との交流会」を開催。こども心理学科4年生でケニア出身のドリス・アワンドゥ・アウィノさんが中心となり、英語を使った歌遊びや、スワヒリ語の童謡「マンボ・サワサワ」を披露しながら園児たちと交流しました。ベース＆ピアノ演奏には事務職員も加わり、園児・保護者と共に多文化を楽しむ一時となりました。

※学校法人聖学院はグローバル・コンパクトに署名・加入し、SDGsを目指した活動を行っています。
※SDGs…2030年までの実現をめざし掲げられた、17の目標と169のターゲットからなる「持続可能な開発目標」

Our Mission

聖学院中学校・高等学校　事務室
（駒込キャンパス）

聖学院中学校・高等学校（以下聖学院中高）の職員業務には様々なものがあります。入試や生徒募集に携わる業務、OBや旧教職員と連携をとる業務、図書館や進路指導室のサポートも行っています。保護者や外部の方の窓口になっている事務室について言えば、学校の修繕を計画・手配したり予算の管理をする会計業務、さらには各種証明書の発行、願書の受付などを行っています。
聖学院中高では2019年度から管理職の業務分担の見直しが行われ、運営統括、教育統括、総務統括の三つの統括部長制となりました。特にこの中の総務統括部長は学校内の施設整備等も取り扱うという新しい役割で、事務だけで受け持っていた部分を協働するような形を取るようになりました。たとえば、今年はゴミ処理の業者が一部変更になり、学校として分別に取り組む必要性が出てきましたが、総務統括部長に中心となって取り組んでいただいたことで、教員、用務員さんを含めた事務、そして生徒が三位一体となり、校内の社会課題プロジェクトとして成立させることができたのはその一例です。
今後の課題としては業務の効率化が挙げられます。様々な業務を見直し再編することで今まで手が回ってなかったこともできるようになります。職員は教員をサポートする役割なので効率化を推進できれば、もっと幅広く、深く、教員を支援できると思います。業務を継続しやすくする上でも効率化は重要です。聖学院中高は歴史ある学校です。これから100年続くことを考えて、より持続可能な教員支援の形を追求していきたいと思っています。

（取材日／2020年2月）

Our Mission

1.
教員が教育に専念できる環境作り

2.
予算を含め潤滑な学校運営の基盤整備

3.
聖学院中学校・高等学校の顔として、信頼される外部対応・窓口業務

●STAFF
辻本修・清水哲夫・塩川祐司・松田明子・平澤千映子・深澤真寿美

●オフィス
聖学院中学校・高等学校　IF

EPISODE #8

聖学院歴史探訪

#8 聖学院教育の目標

-スクール・モットー-

聖学院教育とは徹頭徹尾、キリスト教精神であり、キリスト教精神とはキリストの弟子として生きる信仰と使命のことです。聖学院精神は「経験と奉仕」とか「神を仰ぎ 人に仕う」などの標語に結晶しています。学院の歴史の中で形成されてきたこのスクール・モットーは、明らかに、イエス・キリストの教えられた根源的な戒め「主なるあなたの神を愛せよ」「あなたの隣り人を愛せよ」から汲み出されています。つまり、本学院建学の精神はイエス・キリストの源泉にまで到達し、そこから人類の歴史と文化の全領域に及ぶ清冽で豊かな「生命の水」を汲み出そうとしているのです。

（次号に続く）

出典:聖学院キリスト教センター編『聖学院の精神と歴史』聖学院ゼネラル・サービス,2006年（出典より一部変更）

学校法人 聖学院　理事長／清水　正之　院長／山口　博
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-8351
ホームページ https://www.seig.ac.jp/　E-mail pr_h@seigakuin-univ.ac.jp

■さいたま上尾キャンパス

聖学院大学
・政治経済学部／政治経済学科　・人文学部／欧米文化学科　日本文化学科　児童学科　・心理福祉学部／心理福祉学科
学長／清水　正之　創立／1988年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号　Tel 048-781-0925

聖学院大学大学院
政治政策学研究科／アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科／心理福祉学研究科
創立／1996年　〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1番1号　Tel 048-780-1801

聖学院みどり幼稚園
園長／山川　秀人　創立／1978年
〒331-0045 埼玉県さいたま市西区内野本郷820　Tel 048-622-3864

■駒込キャンパス

聖学院 中学校 高等学校
校長／角田　秀明　創立／1906年
〒114-8502 東京都北区中里3-12-1　Tel 03-3917-1121

女子聖学院 中学校 高等学校
校長／山口　博　創立／1905年
〒114-8574 東京都北区中里3-12-2　Tel 03-3917-2277

聖学院小学校
校長／佐藤　慎　創立／1960年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-1　Tel 03-3917-1555

聖学院幼稚園
園長／佐藤　慎　創立／1912年
〒114-8574 東京都北区中里3-13-2　Tel 03-3917-2725

●インターネットでの寄付のお申し込みについて

クレジットカード（VISA、MasterCard）をお持ちの方は、お申し込みから入金までご自宅等で、PC、スマートフォン、携帯電話からインターネットによるお手続きができます。下記URL、QRコードにアクセス下さい。

https://www.seig-asf.jp/fund/

住所変更・お問い合わせは下記までお願いします。

学校法人聖学院ASF事務局　Tel 03-3917-8352